

經濟學のために

阿 蘇 武

- 一、辯證法的唯物論
- 二、唯物史觀
- 三、經濟學の對象
- 四、經濟學研究の出發點

商品の分析に依つて、現代社會のすべての矛盾を乃至はすべての矛盾の胚種を發見するのだ。

一、辯證法的唯物論

辯證法は自然、人間、社會及び思惟の一般的な運動及發展の法則に關する科學以上の何物でもない。

(河野密譯反デ
ユーリング論)

(七一頁) 即ち自然が辯證法的であるから思惟の辯證法が生ずるのであり、現在が辯證法的の發展をなすが故に人が辯證法的に思惟するのだ。(社會科學第三卷
第四號一三頁) そこで概念辯證法「全實在界に妥當する一般的運動形態の抽象科學としての唯物辯證法の諸原理諸原則」は、我々の科學批判及び科學研究の方法論でなければならぬ。

故に我々の經濟學研究の理論的根據方法論は辯證法的唯物論であり、唯物史觀でなければならぬのである。

然らば辯證法的唯物論とは如何なるものか？ と云ふに、之は一つのまとまつた世界觀であつて一般科學的方法論（認識論をも含む）としての唯物辯證法、自然科學に於ける方法論としての自然の辯證法、および歴史の辯證法（唯物史觀）と云ふ三つの基本的構成要素から成立してゐるのである。（（デボーリン著唯物辯證法と自然科學和譯四頁））ところで、我々は辯證法的唯物論を今、ヨリ詳説具體的に究明する必要があるのだ。その究明の順序として先づ辯證法的唯物論の土臺である所の唯物論の究明からとりかゝることが最も便宜だと思ふ。然らば、

A 唯物論とは？

「精神と自然と何れが本源的かといふこの問題に對する答へ方につれて哲學者は二大陣營に分裂した。自然に對する精神の本源を主張し、從つて結局に於て何等かの種類の宇宙創造を認容した人々は觀念論の陣營を構成し、それに反して自然を本源的なものと思つた人々は唯物論の流派に屬した。（（フオイエルバッハ論 佐野氏譯四四―四五頁））勿論唯物論は「自然を本源的なものとする」と云ふ命題をとるのであり人類の意識が彼等の存在を定めるのではなく、寧ろその反對に人類の社會的存在が彼等の意志を定めると云ふのだ。（（經濟學批判 宮川氏譯四頁））又エシゲルスは反デューリング論に於て思惟及び意識とは何んであるか、何處からそれが生じたかと問ふならば、それは人間の頭腦の所産であり、人間自身はまた環境の中にあつて環境と共に發展した自然の產物であることを見出す。要するに、以上の様な見方、方法をやるのが唯物論の理論的根據であり、唯物論なのだ。然し我々の唯物論は辯證法と結びついてゐることに注意せねばならぬし、そこが主要な所なのだ。それでは辯證法とはどんなものか？

B 辯 證 法

辯證法は現存事物の肯定的理解のうちに、同時にまたその否定のその必然的没落の理解を含め、あらゆる生成した形態を運動の流れにおいて、それ故にまたその暫時的な方面から把握し何物によりても畏伏せしめられず、その本質上批判的であり、革命的であるのだ。(資本論河上肇氏譯 三十二頁)

と、我等の唯物辯證法との相違をはつきりと知つてゐることが又重大なる問題である。即ちヘーゲルにとつては、彼れが觀念の名のもとに一つの獨立せる主體にまで轉化したところのかの思惟過程は、現實的なものの創造主であり、現實的なるものは、たゞこの思惟過程の外的現象をなすに過ぎない。私にあつては之に反し觀念的なるものは人間の頭腦に移植され翻譯されたる物質的なるものに外ならぬ。辯證法はヘーゲルの手において神秘化されたけれども、そのことは決して彼れがその一般的運動形態を始めて包括的な且つ意識的な仕方で叙述したといふことを妨げはしなかつた。辯證法は彼にあつては逆立ちしてゐる。吾々は神秘的な外皮の中に合理的な核心を發見するためこれを顛倒しななければならぬ。(資本論河上肇氏譯 三一頁) そこで辯證法は觀念辯證法であつてはならぬし、逆に唯物辯證法でなければ駄目だと云ふことになるのだ。そしてその理論的根據がすでにわかつたし又辯證法とはどんなものかといふ概念も了解することが出来たと思ふが、然し以下辯證法の三つの特徴をあげることによつてより具體的に辯證法の何たるかを理解することが出来ると思ふ。そこでその特質をあげてみると。

(一) 辯證法はその最も深き一面性から解放されたる意味に於ける發展に關する學說である。(デボリン著レーニン譯の辯證法河上譯七七頁)

即ち辯證法は事物の發展運動の理論である。

(二) 辯證法は飛躍、量の質への轉換に關する理論だ。

(三) 辯證法は矛盾、否定の否定の學説だ。

發展は對立物の闘争である。(ヘーゲルの辯證法)
(河上譯一〇七頁)

以上が辯證法の三特質であるのだ。が、次に然らば辯證法が正しき理論であるか否かと云ふ問題が起つて來る。そこでその正しきものであることを證明する必要がある。

之に對してエンゲルスをして答へしめやう。自然界は辯證法の證明であるそして近世科學は此の證明の爲に極めて豊富な日々増加する所の材料を供給し、それによつて結局自然は形而上學的でなく、辯證法的に働くものだといふ事を立證してくれたのである。即ち自然はとこしへに同一の循環運動を爲し居るものではなく現實の歴史を作りあげてゐる、此に於て、我々は先づ何人よりもダーウンを推さねばならない。彼は現時の一切の生物體即ち植物動物及び人類すらもが幾百年の進化の過程の產物であることを證明して、形而上學的の自然觀に致命的の打撃を與へた。(エンゲルス著空想から科學界氏譯四〇頁)以上の證言に依つて、辯證法が正しきものであることが解つた。そこで最後に唯物論と辯證法との關係、結び即ち辯證法的唯物論の結語を述べる必要がある。

我々は唯物論が辯證法と不可離關係の統一物であることは前述せし如く我々の辯證法は唯物論との統一されたる一つのまとまりたる理論なのだ。故に辯證法的唯物論は一つの統一されたる我々の哲學であり、世界觀であり、一般科

學方法論であるのだ。又辯證法は運動の論理學だと云へるのだ。辯證法は自然、人間社會及び思惟の一般的な運動及び發展の法則に關する科學以上の何物でもない。(反デュリッング論 河野密譯三一七頁) 所で以下重複するの觀もあるが、今少し辯證法的唯物論の結語結論をまとめてみる。

發展運動の論理學と云ふ時、辯證的唯物論は物質がその基礎なのだ。此の時物質の觀念を (一) 物質の本質 (二) 物質の存在形態と云ふ具合に考へることが出来る。そうして、このことは我々が物質から出發すると云ふ場合には一定の形態に於て存在する物質なるものから出發することを意味するのである。然らば、物質の存在形態は何か？ それは運動である。然して運動なる概念は物質なる概念から引離しては考へられない。運動は物質の存在形態である。何時如何なる處にも、運動なき物質、物質なき運動はなかつた、またあり得ない。(反デュリッング論) 即ち辯證法は總ての事物を運動の流れに於てみる、然らばその運動の原動力は何であるか？

又どこから生れて來るか？

それは神でもなく、絶對的概念でもなく、物自體に含まれたる矛盾のうちに於ける運動の原動力を認めるのだ。「自己運動の過程として」みるのだ。辯證法的唯物論は世界自身の性質とその存在の一般的そのものであると共に、それを思惟的に把握したものである。

そこで辯證法的唯物論を定義づけると總體的なる全面的なる事物の存在の形式の思惟的把握である。この場合、辯證法は事物が絶えざる運動の發展においてあること、その發展は矛盾を動力とすること、發展は飛躍を以て進むこと

を理解するものである。然して辯證法的な觀察は具體的と云ふことが大切なことである。(社會經濟體系 二十卷三一四頁)

辯證法的唯物論は事象の現實的な性質を眞に理解するにある。我々が事象を辯證法的唯物論的に見るから事象が辯證法的唯物論的な性質を示すのではなく、我々が事象を眞に正しく理解しきへすれば、それは辯證法的唯物論的な性質を顯すのである。辯證法的唯物論はこれをたゞ我々の頭腦に翻譯するものにすぎない。故に我々にとつては最後に重大なる問題は事象を現實的な姿に於て究めることだ。

そこで結論としてエンゲルスをして辯證法的原理が正しいものであることを語らしめよう。原理は研究の出發點ではなくして、その究極の結果である。それは自然や人間の歴史に適用されるのではなくして、その究極の結果である。それは自然や人間の歴史に適用されるのではなくして、それから抽象されるのである。自然や人間の世界が原理に依つて律せられるのではなくして原理はそれが自然及び歴史と一致する限りに於てのみ正當なのである。(反デューリン 理論林河野譯)

三十
二頁

二、唯物史觀

デボーリンは辯證法的唯物論を三區分して曰く、(一)思惟の辯證法、(二)自然の辯證法、(三)歴史の辯證法。と云つてゐるのである。所で歴史の辯證法である唯物史觀とは、歴史の一般的運動形態及び運動法則の學としての歴史の辯證法のことだ。故にそれ自體概念辯證法を方法論的に基礎とすると共に、又概念辯證法の歴史の地位に於ける具體

化されたる形態である。(マルクス主義講座
第十二卷一八七頁)

然らば概念の辯證法とは如何なる内容のものか？

之は前述せし如く「全實在界に妥當する一般的運動法則及び一般的運動形態の抽象的科學としての唯物辯證法の諸原則原理のことを云ふのだ。」(マルクス主義講座
第十二卷一七七頁) 又唯物史觀の説明に就ては河上肇氏社會問題研究第九十九冊に依ると、唯物史觀はヘーゲルの觀念哲學から辯證法を採り來つたものが即ちマルクス主義の辯證的唯物論であり、それに依つて歴史又は社會に對する唯物論的見方が即ち唯物史觀だと云はれてゐる。

次に大森義太郎氏の唯物史觀の説明はどんなものか、氏に依ると、世界は自然と社會とに分れてゐる。故に兩者の運動法則は具體化されては (一) 自然に於ける運動法則 (二) 社會に於ける運動法則があるのであり、然る時固有の思惟法則が樹立されるのである。即ち此の思惟法則は (一) 自然の思惟法則 (二) 社會の思惟法則とを生むのであり、故に思惟法則の樹立は科學の方法論を確立することになる。一般思惟法則の闡明はとりも直さず一般科學の一般の方法論を明にする。故に自然及び社會の思惟法則の樹立は、自然科學の方法論、社會科學の方法論を確立する。

實に以上の説明の通り唯物史觀は、一般的辯證法(唯物論的な)の社會への適用であり、一般運動法則の社會において具體化されたるものをもつてその對象とする。故に唯物史觀の考察に辯證法的唯物論の把握を缺き得ない。後者こそは前者の基礎である。そして唯物史觀は社會運動法則を明にすることをその任務とする。即ち唯物史觀とは社會の構成並に變革の過程を説明するものだ。然らば社會の運動法則の原動力は何？ 此に答へるに經濟學批判の序

文に於ける唯物史觀の公式要綱を以て答へさせることが意義あることと思ふ。即ち「人類は彼等の生活の社會的生産に於て、一定の必然的の、彼等の意思より獨立したる關係に即ち彼等の物質的生産力の一定の發展段階に適應する所の生産關係に入り込むものである。これ等の生産關係の總和は社會の經濟的構造即ちその上に法律上及び政治上の上層建築が宿り、そして一定の社會的意識形態がそれに適應する所の眞實の土台をなすものである。物質的生活の生産方法は社會的、政治的及び精神的の生活一般を規定する。人類の意識が彼等の存在を決定するのではなくして寧ろ反對に彼等の社會的存在が彼等の意識を決定するのである。社會の物質的生産力は其發展の一定の段階に達すればそれが從來そのもの中で活動してゐる所の現存生産關係、或は唯その法律上の表現に過ぎない所有關係と云ふものと衝突することとなる。これ等の關係は、生産力の發展形式であつたものが變じて生産力の束縛となるに至る。是に於て社會革命の時代が到來する。經濟的基礎の變動に伴つて、巨大な上層建築の全部が或は、比較的徐々に、或は比較的急激に變革する。斯如き變革の時代をその時代の意識に依つて判斷しようとしても、それは宛も一個人を知らふとする時にその個人が自然で考へてゐる所を以て判斷しやうとすると同様に不可能のことである。それよりもむしろこの意識なるものが物質的生活の矛盾から即ち社會の生産力と生産關係との間に存在する衝突から説明せられなければならないのである。」即ち唯物史觀に依るなら「社會的意識は社會的存在の反映である」と云ふことが問題なのだ。然して人類がその中に住する所の社會關係は人類の意志から獨立した獨自の發展法則の存することを教へる。資本論第二版序文に「社會の運動を（社會がどういふ方面へ動いてゆくかといふこと）たゞに人間の意志、意識および意圖から獨立

してゐるばかりでなくむしろ逆にその意欲、意識および意圖を規定するところの諸法則に支配されてゐる、——一つの自然史的過程として考察した。」人類は社會生活を營む以上この發展法則の制約から免がれることが出来ないといふ。では社會に於ける變革發展を規定するものは何であるか？

それは、生産力と生産關係との矛盾である。

然らば生産關係とは？ 之は經濟關係のことである、吾々は生活を維持してゆくためにお互の間にいろいろな物質的關係——物を媒介とする關係、例へば賣買には賣買される物が人と人との間に介在する——を結ぶことになるのであるが、それが謂はゆる經濟關係であり、そして總ての人々の間に結ばれる斯かる經濟諸關係または生産關係の一切がとりも直さず社會の經濟的構造または經濟組織を形成してゐる。社會の物質的生産力に於ける變革が從來の生産關係と矛盾衝突するに至る——これがあらゆる社會變革の動因であるのだ。

即ち經濟上に於ける人と人との社會的關係の總和は社會の經濟的構造を形成してゐるものであるが、この經濟的構造こそ社會の「實在的な土臺」であり、「法律上および政治上の上層建築」はこの土臺の上に立つてをり様々な「社會的意識形態」もまた此の土臺に適應してゐるのである。(河上氏資本論 入門一一頁) 要するに社會の經濟的構造が社會の現實の土臺なのだ。然らば經濟的構造は何に依存するや？

それは物質的生産力であるのだ。

然らば物質的生産力とは何か？

之は人間による自然の加工（生産）に役立つべき状態におかれてゐる一切の力の總稱である。（河上肇氏社）そこで究極に於て生産力が決定的の動因である。従つて社會組織の變革は根本的にはかゝる社會の物質的生産力の變化に依ること又實在的な土臺の變革にある。（社會科學第三卷第四號及資本論入門）要するに歴史の辯證法は基礎的には社會の物質的生産力と生産關係との矛盾對立、而して生産力と生産關係との矛盾と云ふことは結局人と人との關係、互に相矛盾する利害を追及する人と人との關係として現出せざるを得ない。故に生産關係と生産力との矛盾は生産手段の配分關係、生産關係の最も根本的な所有關係に關係する時、解決者は階級闘争である。諸々の社會現象の間の複雑な相互作用、相互關係は究極に於て觀念ではなく、物質的生産力に歸着せしめられるのである。故に階級と階級との闘争は政治的闘争である。以上の説明研究に依り唯物史觀こそ正しき社會の觀方であり、歴史の認識の方法であることを知るのだ。

三、經濟學の對象

唯物史觀に於て我々は社會の構成並に變革の過程を研究して來た。そしてそこで我々は辯證法的な科學とは事物を具體的なものの發展として認識する科學であることを了解した。

そこで辯證法にとつて重要なのは抽象的の死せるもの、動かぬものではなく具體的なものである。具體的普遍とはヘーゲルのしばしば云つてゐる如く「生けるもの」である。「眞理は常に具體的である」のだ。（經濟往來第五卷第一號三木清氏辯證法の

俗流化)
三一頁

社會の基礎的土台が經濟的構造即ち生産關係である以上、我々は經濟學の研究の對象は現實的な生産關係でなければならぬのだ。即ち現代社會の生産關係に於て支配的地位にある資本主義的生產關係でなければならぬのだ。マルクスは個人の孤立的生産孤立的經濟の可能を全然信じなかつた。彼は云つてゐる。「社會を離れたる孤立人格の生産——夫は社會的諸力を既に力學的にも内具してゐる文明人がある。偶然によりて無人の地に漂着した場合の稀有なことである——は恰も共に生活し共に語りつゝある個人なくして發達した言語があるといふが如き一つの妄想である」それ故、我々が生産といふ中には、夫は一定の社會的發展段階に於ける生産——社會的個人の生産を意味する。(方法論三頁)

何故一定の社會的發展段階に於ける生産關係でなければならぬのか？

それは 人類は彼等の生活の社會的生產に於て一定の必然の生産關係にはいり込むのである 以上一定の發展段階の生産關係としての具體的な資本主義的生產關係が我々の經濟學の對象とならざるを得ないし、そうなるのが必然だ。そこで今この資本家的生産關係が經濟學研究の對象で、なければならぬ。その理論づけを以下猶展開する。資本論に於てマルクスは、

「私の立場は社會の經濟的構造の發展を一つの自然史的過程として把握するものである。(資本論第一卷) 又各の歴史的時代にはそれ特有な法則が存してゐる。(資本論第一卷) 即ち奴隸の社會、封建制の社會、資本制の社會といふ如く(資本論七頁)」然して今各歴史的時代に特有の法則があると云ふこの理論の正しさを證明せんに「人類の意識が彼等の存在を

規定するのではなく、むしろ逆に人類の社會的存在が彼等の意識（社會的意識）を規定する」のであり、我々にとつては人間の意識から獨立して存在する客觀的實在を認め且つそれが人間の感覺——經驗——を通して人間のためのもの（現象）となり、人間の意識内容を構成し、更にそれが科學的に整理されることによつて——もちろん完全にはなく略ぼ近似的にといふにすぎぬけれども何程かに於て忠實なる外的現象の反映（理論）となることを認める。だから理論の本源は觀念ではなく、外的現象だ（河上氏資本論 入門三十八頁）即ち社會の運動をば、たゞに人間の意志、意識および意圖から獨立してゐるばかりでなく、むしろ逆に、その意欲、意識および意圖を規定するところの諸法則に支配されてゐる。——一つの自然史過程として考察した。（資本論河上譯 二七一—二八頁）

以上に依り吾々の觀察の仕方は無前提ではない。それは現實的な前提から出發し、瞬時といへども之を見失はない。その前提は何等か空想的な閉鎖性と固定性における人間ではなく、一定條件のもとでの現實的な經驗的に、見ることのできる發展過程に於ける人間である。（資本論入門 二四〇頁）すでに唯物史觀に依つて證明せられた如く、すでに意識的要素が文化史において斯程迄の從屬的役割を演ずるものとすれば、文化そのものを對象とする批判が意識の何等かの形態あるひは何等かの結果をその基礎となし得ざることは、おのづから明である。即ち觀念ではなくたゞ外的現象のみがかかる批判のために出發點として役立ち得る。故に吾々の經濟學の研究の對象は社會的にまた歴史的に規定されたる或る特殊なる具象的な生産關係である。そこで我々の出發點および基礎として役立つものは事實であり外的現象であるのだ。

此の時、事實であり、外的現象とは現代に於ては何物を指すのであるか？

之は現代社會に於ける生産であるのだ。従つてそれが吾々の研究にとつて現實的の出發點である。ところで、それは一見して明かなやうに種々なる諸要素から成立してゐるが、しかしそのなかで支配的地位を占めてゐるものは、謂はゞ資本家的生産である。故に我々の經濟學の目的、對象とするところは、資本家的生産に特有な諸法則の闡明にあるのだ。(河上氏經濟學 大綱二三頁)

故に經濟學の研究目的は資本家的生産の仕方と、それに適應する生産關係および交易關係である(資本論河上譯 一一頁)と云ふことが出来るのだ。

上述したことに依り經濟學の對象が資本家的生産關係でなければならぬことを認めたので、次に然らば資本家的生産關係、資本家的社會の經濟組織はどんなものか？といふことを明にする必要がある。そこでまづ生産關係には二類型があることを認めざるを得ない。

(一) 組織社會の生産關係 (××主義社會の生産關係)

(二) 非組織的社會の生産關係 (即ち理論經濟學の對象としての資本主義的社會の生産關係)

即ち(二)の非組織的社會の生産關係こそ資本主義社會の生産關係なのだ。即ちこの社會は商品生産の社會であり即ち賃労働の搾取を土臺とした所の生産關係なのだ。即ち「公正なる」契約の形式の下には狂暴なる労働の搾取が潜んでゐるのである。この社會では労働の搾取は隠蔽されたる秘密の性質を有する。(一)では搾取の存在すると云ふ事實

そのものを曝露し指摘しなければならぬ。此の目的と任務を有するものがプロレタリア經濟學なのだ、これはマルクスの勞働價值説に依つて此の秘密が遺憾なく曝露される。(プロレタリア經濟學方) (法論一四頁、二〇頁)

所で資本主義社會の何たるかを今要約してみると「商品生産の發展の基礎の上に成立せる資本主義社會は、最も重要な且つ決定的な生産手段に對する、資本家と大地主との階級の獨占により、また生産手段を奪はれ、彼等の勞働力を賣るべく強制されてゐるところの、プロレタリア階級の賃勞働の搾取により、特徴づけられてゐる。それは、利潤を得んがための商品生産およびそれに結びついてゐる、全體としての生産過程の、無計畫性と無政府狀態とにより、特徴づけられてゐる。搾取關係およびブルジョア階級の經濟的支配はプロレタリアート抑壓のための機關としての、資本の國家的機構のうちに、その政治的表現を見出す」のだ。(社會問題研究第(九十一冊二八頁))

以上を要約してみると此の社會の特徴は、

- (一) 商品生産を土臺とする社會である。
- (二) 資本家と勞働者とからなる階級社會だ。
- (三) 商品生産にかくれたる賃勞働の搾取を目的根底とした生産様式
- (四) 無政府的生産なる故、恐慌を引き起すこと。
- (五) 産業豫備軍を生み出すこと。
- (六) 社會的生產が資本家的領有となり、資本の集中がなされること。

以上で資本家的生産關係の特徴を、研究した。此處で結論として、經濟學の目的對象は資本家的生産の仕方を、究明することであるを知ると共に、實踐的目的に役立たぬ様な科學を認むる者はない。經濟學は、其が現代社會の機構を曝露し、その根本傾向を發見し、之によりその改造を容易ならしめる限りに於てのみ、有益である。故に經濟學とは資本主義社會の生産關係を研究する理論科學でなければならぬ。(ア、コーン著プロレタリア經濟學の方法論二二頁村田正譯)

此のことに就て、「資本論」に於て又マルクスは「近代社會の經濟的運動法則を曝露することはこの著作の最後の窮極目的である。」(資本論河上氏譯十四頁)と言つてゐるのである。

四、經濟學研究の出發點

前章に於て資本主義社會は商品生産を特徴とする社會であることを究明した。所で吾々は思惟の道程において、最も簡單な範疇から出發して次第により複雑なものへ進み、最後に最も複雑な諸規定の綜合から成るところの、最も具象的なものに到達する。(河上氏經濟學大綱二十五頁)ことが重要なことであり我々の研究の方法の特徴なのだ。即ち抽象から具體へ、簡單から複雑へだ。

經濟學研究にあつても、吾々は再びこれと同じ道行を取るのである。すなはち最初は資本主義社會の最も簡單な、從つて最も抽象的な關係たる商品交換關係から出發し、しかる後に、たゞ商品といふだけではく、もつと具體的な條件を具へてゐる特種の商品たる貨幣に進み、その次には、たゞ貨幣といふだけではなく、剩餘價值を生むといふ特殊

の機能をもつた貨幣たる資本に進み、更にまた、たゞ資本といふだけでなく、種々の機能や種々の形態をもつた、色々な特殊の資本に進むといふ風に最も抽象的なものから出發して次第により具體的なものへ進むのである。こういうのが科學研究の秩序ある道行きの一般的な方針なのであるのだ。(社會問題研究 第九十九冊二九頁)

所で「資本論」開卷第一頁に於て「資本家的生産の支配してゐる諸社會の富は「恐ろしく膨大な商品集大成」として現はれ、個々の商品はその原基形態として現はれる。だから吾々の研究は商品の分析をもつて始まる。」とマルクスは商品の分析をもつてその研究の出發點としてゐるのである。故に吾々も亦資本家的社會を構成する原基形態であり細胞が商品である以上、此の商品の研究を以て經濟學の研究の出發點としなければならぬのだ。

所で商品の研究に於て吾々は思惟によつてこの商品なるものを分析するのである。然らばその道具は何か？

それは抽象力であるのだ。即ち「經濟的諸形態の分析にあたつては、顯微鏡も化學的試薬も役に立ちえない。抽象力が兩者に代位せねばならぬ。」(河上氏譯「資本論」一〇頁)この分析とは辯證法の一特徴である所の統一物なるものを分解して、その矛盾に充ちたる構成成分を認識せんためなのだ。(河上氏「マルクス主義經濟學」の基礎理論三〇七頁)レーニンは次の如く言つてゐる。「マルクス

は、資本論において、先づブルジョアの商品社會の最も簡單な、最も普通な、最も基礎的な、最も大量的な、最も日常的な、幾億回となく觀察されるべき、關係、すなはち、商品交換を分析してゐる。その分析は、この最も簡單な現象のうちに(ブルジョア社會のこの「細胞」のうちに)現代社會のすべての矛盾を(乃至はすべての矛盾の胚種を)發見してゐる。それより以上の叙述は、これらの矛盾と、その根本構成成分の總體より成るこの社會との發展「成長ならび

に「運動を、その始めから終りまで吾々に示す。」(エンニン、河上譯辯證法的唯物論に就て五九—九六頁)と云つてゐる如く、商品の分析が我々の經濟學の基礎的地位を占めてゐるかを以上が物語る所だ。

實に商品の分析に依つて如何に現代社會が矛盾に充ちた構成物であるかが理解されるのだ。

即ち「統一的なるもの」分解と、その矛盾に満ちた構成成分の認識とは、辯證法の本質だ。『即ち商品(統一物なるもの)を分解してその構成分として使用價值および價值(この二つは互に矛盾してゐる對立物だ)を發見するのだ。』(社研第九十一冊九頁)

即ち之は一方では社會的生產物でありながら、しかも他方では私的占有物となつてゐるのであり、これが商品に内在する根本的な矛盾なのだ。(社研九十一冊九二頁)

之のヨリ具體的説明發展は剩餘價值説、勞働價值説の説明となり、賃勞働の搾取となり、勞働問題の發生となり、資本家に對する勞働者の經濟闘争となり、(組合運動)又政治闘争及階級闘争となるのだ。

實に商品は矛盾極まれる現代社會の縮圖なのだ。故に經濟學研究の出發點は商品の分析でなければならぬ。すでに紙數を超過してゐるのでこれで筆する。